

# 幼稚園教員養成課程の学生における 幼児が自然と触れ合うことの発達の意義のとらえ方

—国立江田島青少年交流の家で実施された自然体験活動に参加した幼児の観察をもとに—

青山 翔

How to understand the developmental significance of contact with nature for kindergarteners  
by students in kindergarten teacher training courses:

Based on the observation of kindergarteners who participated in nature experience activities  
held at the national Etajima youth friendship center

AOYAMA Sho

(Received December 15, 2021)

キーワード：環境、自然、幼児、季節、幼稚園教員養成

## はじめに

幼児において自然に直接触れる体験をすることは、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることに繋がることから、幼児が自然との関わりを深めることができるように工夫することが教師に求められる<sup>1)</sup>。幼児が自然と触れ合う体験を十分に得られるようにするためには、園内の自然環境を整備したり、地域の自然に触れる機会を設けたりして、身近に自然と触れ合う機会をつくることが大切である<sup>1)</sup>。しかし、近年は、少子化、情報技術の普及、地域とのつながりの希薄化等の社会変化に伴い、これまで身近にあった子どもの遊び場や体験の場が少なくなり、自然体験を日常的に積み重ねて成長する機会が減少している<sup>2)</sup>。そのため、保育者には意識的に自然に触れる機会を子どもに提供することが求められる<sup>2)</sup>が、園内の自然環境を十分に整備することが難しいといった現状を抱える園は少なくない。また、保育者の中にも自然体験の機会が十分でなかった者が増えており、幼稚園教員養成課程の学生には自然体験不足の傾向がうかがえる<sup>3)</sup>。したがって、幼稚園教員養成課程に在籍する学生が、実際に、自然に触れ合う幼児の様子を観察することを通して、幼児が自然と触れ合うことの発達の意義をとらえられる場を設けることは重要であると考えられる。

## 1. 研究の目的

本研究の目的は、豊かな自然環境で実施された自然体験活動に参加する幼児の様子を幼稚園教員養成課程に在籍する学生が観察することで、幼児が自然に触れ合うことの発達の意義をどのようにとらえられるのかということについて明らかにすることである。本研究により、幼稚園教員養成課程に在籍する学生に対して幼児が自然に触れ合う機会を提供することの意義を実感できるような場を設けることの重要性が認識されると期待される。

## 2. 研究の方法

### 2-1 対象者

A 県 B 大学に在籍する幼稚園教員養成課程の大学 3 年生 9 名を対象とした。

## 2-2 研究計画

幼児が豊かな自然に触れ合うことのできる機会を提供することを目的として、国立江田島青少年交流の家主催の自然体験活動が敷地内にある水晶山を会場として2020年10月に実施された。自然体験活動には、合計20組の幼児とその保護者が参加した。水晶山での自然体験活動の主な内容は、水晶山での自由遊び、水晶山の探検、焼き芋作りであった（表1参照）。自然体験活動当日の様子を示す写真1～3および水晶山に生息する危険な虫や植物についての説明を記した写真付きのボード（写真4）を以下に示す。

表1 国立江田島青少年交流の家で実施された自然体験活動の内容

時間	内容
10:00	受付開始 ・水晶山で自由遊び ・水晶山の探検 ・焼き芋作り etc
15:00	活動終了



写真1 水晶山で自由遊び



写真2 水晶山の探検



写真3 焼き芋作り



写真4 危険な虫や植物の説明

本稿著者は、国立江田島青少年交流の家の職員の方から自然体験活動の協力者としての依頼をいただき、本稿著者のゼミ生でもあった対象者は、自然体験活動当日において、自然体験活動参加者の誘導や安全対策上の監視等を行う運営ボランティアをしながら、幼児が自然体験活動に参加している実際の様子を観察した。自然体験活動終了後、対象者に対して、「自然体験活動に参加した幼児の観察をもとに考えられる幼児が自然と触れ合うことの発達の意義は何か」という質問1をし、自由記述で回答を求めた。自然環境の中には倒木、石、ハチ等の危険な要素が多数存在することから、保育者は幼児が自然と触れ合う際に安全対策について十分に留意する必要がある<sup>4,5)</sup>。したがって、対象者に対して、「自然体験活動に参加した幼児の観察をもとに考えられる安全対策上の留意点は何か」という質問2をし、自由記述で回答を求めた。

## 2-3 倫理的配慮

本研究は、対象者に研究の目的や方法、個人情報への扱いについて十分な説明を行い、同意を得た。対象者に対する自由記述での回答は無記名で実施したうえでデータ処理を行った。

## 2-4 分析方法

質問1および質問2に対する自由記述での回答をそれぞれKH Coder<sup>6,7)</sup>により分析し、頻出語および共起関係にある語を抽出した。その結果から代表的な記述例を抽出し、回答内容を検討した。

## 3. 結果

### 3-1 質問1についての自由記述での回答に関する結果

対象者に対する質問1「自然体験活動に参加した幼児の観察をもとに考えられる幼児が自然と触れ合うことの発達の意義は何か」についての自由記述をKH Coder<sup>6,7)</sup>で分析し、多く用いられていた単語を抽出し、自由記述全体において出現回数が2回以上の語を表2に示した。

表2 質問1についての自由記述に関する頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
感じる	16	動かす	4	貴重	2
自然	12	環境	3	最後	2
子ども	7	季節	3	姿	2
体験	7	景色	3	自由	2
焼き芋	6	自分	3	主体	2
経験	5	触れる	3	秋	2
山	5	登る	3	森	2
体	5	普段	3	挑戦	2
火	4	遊び	3	頂上	2
機会	4	遊べる	3	道具	2
作る	4	きれい	2	遊ぶ	2
食べる	4	気持ち	2		

対象者が自由記述した質問1「自然体験活動に参加した幼児の観察をもとに考えられる幼児が自然と触れ合うことの発達の意義は何か」の内容をKH Coder<sup>6,7)</sup>で分析し、自由記述に使用されている語において、出現するパターンが似ている語と語を線で繋いだネットワーク図(図1)を抽出した。6つのグループが抽出され、グループ内の語は繋がりがあると考えられる。

1つ目のグループは「焼き芋」、「食べる」、「作る」、「火」、「経験」、「普段」、「最後」、「貴重」といった語がつながるグループである。焼き芋は、主に秋に収穫されるサツマイモが用いられることから秋によく行われる。子どもが普段の生活では経験することが難しい焼き芋を火のおこし方から食べるころまで経験するといった貴重な機会を得ることや秋という季節を感じる内容に関する記述である。

2つ目に「感じる」、「自然」、「体験」といった語がつながるグループである。幼児の自然体験について対象者が感じていたことに関する記述である。

3つ目に「山」、「環境」、「季節」、「秋」、「触れる」、「遊ぶ」といった語がつながるグループである。山という自然環境においていろいろなものに触れたり、遊んだりすることを通して、子どもは秋という季節を感じていたということに関する記述である。

4つ目に「子ども」、「自由」、「主体」、「遊び」、「道具」、「自分」といった語がつながるグループである。道具がほとんどない豊かな自然環境において、子どもが主体性をもって自由に遊ぶことができていたということについての記述である。

5つ目に「挑戦」、「登る」、「森」、「頂上」、「気持ち」、「きれい」、「景色」といった語がつながるグループである。幼児が山の頂上を目指して登ることに挑戦する気持ちや森の景色に感動してきれいという思いをもっていたことに関する記述である。



対象者が自由記述した質問2「自然体験活動に参加した幼児の観察をもとに考えられる安全対策上の留意点は何か」の内容をKH Coder<sup>6,7)</sup>で分析し、自由記述に使用されている語において、出現するパターンが似ている語と語を線で繋いだネットワーク図(図2)を抽出した。3つのグループが抽出され、グループ内の語は繋がりがあると考えられる。

1つ目のグループは「ムカデ」、「危ない」、「感じる」といった語がつながるグループである。ムカデに子どもが触れると危ないと対象者が感じていたことに関する記述である。

2つ目のグループは「山」、「滑る」といった語がつながるグループである。子どもが山を登る際に、滑ってケガをしてしまうリスクがあるといったことについての記述である。

3つ目のグループは「ウルシ」、「生える」といった語がつながるグループである。生えているウルシに子どもが触れたら危ないと対象者が感じていたことに関する記述である。

尚、図1と同様に、グループ間でも語と語のつながりが認められる場合には、実践ではなく点線で結ばれている。また、囲う円の大きさは、その語の出現回数が多いほど大きな円として描画されている。

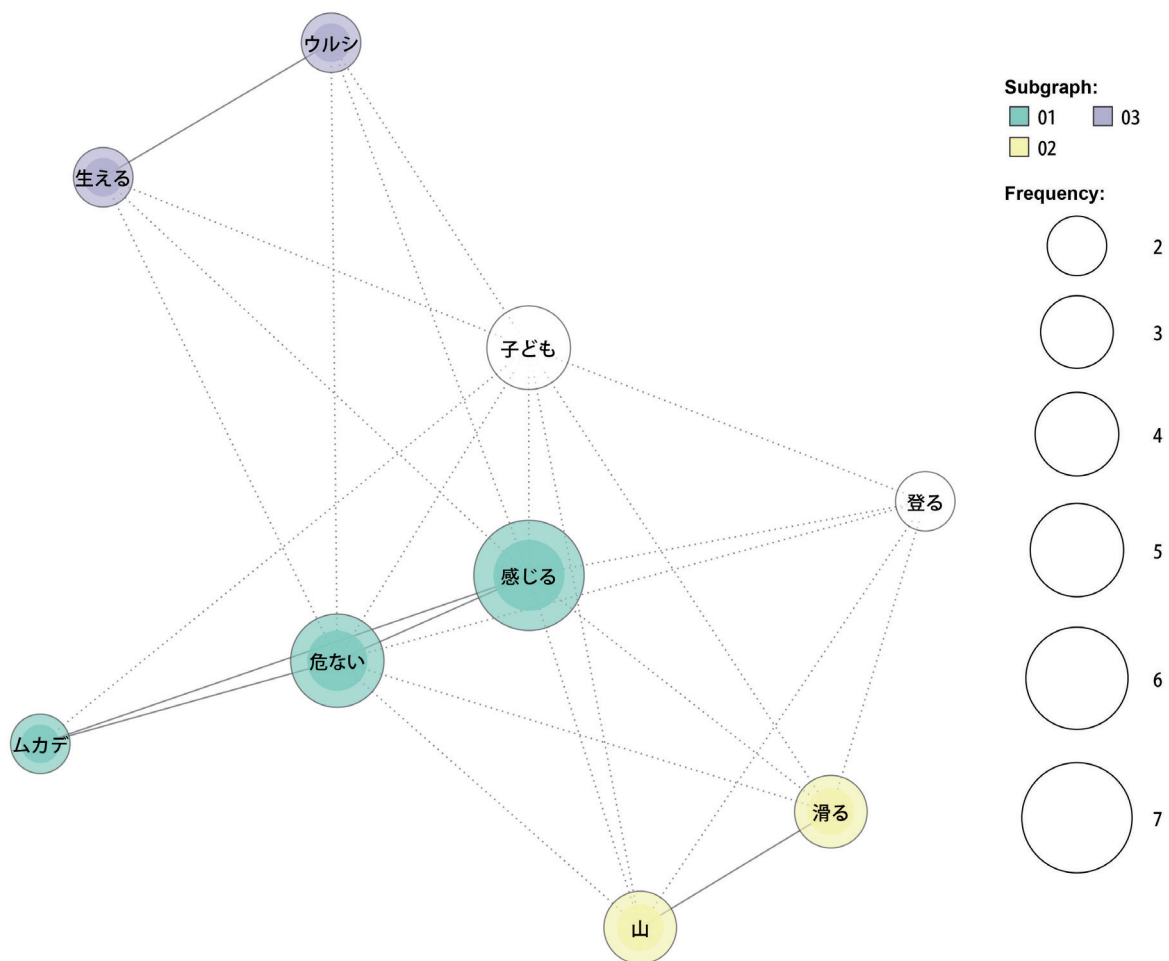


図2 質問2についての自由記述に関する共起ネットワーク

#### 4. 考察

##### 4-1 質問1についての自由記述での回答に関する考察

質問1についての自由記述に関する頻出語(表2)より、「感じる」(出現回数16回)、「自然」(出現回数12回)、「体験」(出現回数7回)、「焼き芋」(出現回数6回)、「経験」(出現回数5回)、「山」(出現回数5回)、「火」(出現回数4回)、「作る」(出現回数4回)、「食べる」(出現回数4回)、「季節」(出現回数3回)、「景色」(出現回数3回)、「触れる」(出現回数3回)、「登る」(出現回数3回)、「普段」(出現回数3回)、「きれい」(出現回数2回)、「貴重」(出現回数2回)、



「最後」（出現回数2回）、「秋」（出現回数2回）、「挑戦」（出現回数2回）、「頂上」（出現回数2回）といった頻出語が見られた。また、質問1についての自由記述に関する共起ネットワーク（図1）より、「焼き芋」、「食べる」、「作る」、「火」、「経験」、「普段」、「最後」、「貴重」といった語がつながるグループ、「感じる」、「自然」、「体験」といった語がつながるグループ、「山」、「環境」、「季節」、「秋」、「触れる」、「遊ぶ」といった語がつながるグループ、「挑戦」、「登る」、「森」、「頂上」、「気持ち」、「きれい」、「景色」といった語がつながるグループが見られた。幼稚園教育要領解説<sup>1)</sup>には、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に含まれる自然との関わりについて、自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探求心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになると述べられている。また、身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」の内容において(1)自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気づく、(2)季節により自然や人間の生活に変化のあることに気づくと記載が見られる。幼児が自然体験活動に参加している様子を観察することで、幼児が自然に触れる体験を通して、山登りに挑戦したいといった自然に対する好奇心をもち、山の頂上からの景色をきれいだと感じるといった自然への愛情や畏敬の念をもつことができたこととらえられていた対象者が複数名いたと考えられる。また、幼稚園教育要領の領域「環境」のねらいについて、幼児は、「自然」を五感で感じとることが大切である<sup>8)</sup>。幼児は、自然体験活動において、普段経験することが難しい焼き芋を火からおこして作るという経験だけでなく、最後に食べることで秋という季節ならではの自然について味覚を通して感じとる経験をしていたこととらえられていた対象者が複数名いたと考えられる。一方で、言葉などで表現することや身近な事象への関心の高まりといったことについてとらえられている対象者はいなかったことが課題として見られた。したがって、幼児は、自然との触れ合いを通して、好奇心や探求心をもって考えたことをその幼児なりの言葉などで素直に表現しながら、身近な事象への関心を高めていく<sup>1)</sup>ということを幼稚園教員養成課程の学生に伝え、幼児の表現を引き出すために幼稚園教員としての役割について考える機会を設けることが今後求められる。

質問1についての自由記述に関する頻出語（表2）より、「子ども」（出現回数7回）、「体」（出現回数5回）、「動かす」（出現回数4回）、「遊び」（出現回数3回）、「遊べる」（出現回数3回）、「遊ぶ」（出現回数2回）、「自由」（出現回数2回）、「主体」（出現回数2回）、「道具」（出現回数2回）といった頻出語が見られた。また、質問1についての自由記述に関する共起ネットワーク（図1）より、「子ども」、「自由」、「主体」、「遊び」、「道具」、「自分」といった語がつながるグループや「体」、「動かす」といった語がつながるグループが見られた。幼児期の子どもにおいては、身の周りにある自然などの様々な事象に触れる機会を多くもつようにし、それらを取り入れて遊ぶ楽しさを十分に味わうことが必要である<sup>1)</sup>。幼児が自然体験活動に参加している様子を観察することで、幼児は遊具等の遊ぶための道具がなくても自然環境をいかして自由に遊ぶ楽しさを主体的に味わっているととらえられていた対象者が複数名いたと考えられる。また、幼児期運動指針<sup>9)</sup>では、特に幼児期の遊びの中で、「体のバランスをとる動き」、「体を移動する動き」、「用具などを操作する動き」等の多様な動きを経験できる機会を作ることを推奨している。野外での保育はフィールドや活動に多様性や可塑性があり、子どもそれぞれの興味・関心によって活動を広げていくことができ、このような環境においては多様な動きを経験できる機会が保障されていると報告されている<sup>10)</sup>。幼児が自然体験活動に参加している様子を観察することで、幼児が森という自然環境をいかして体を動かす機会を得ていたこととらえられていた対象者が複数名いたと推察される。

#### 4-2 質問2についての自由記述での回答に関する考察

質問2についての自由記述に関する頻出語（表2）より、「感じる」（出現回数7回）、「危ない」（出現回数5回）、「山」（出現回数3回）、「ウルシ」（出現回数2回）、「ムカデ」（出現回数2回）、「生える」（出現回数2回）といった頻出語が見られた。また、質問2についての自由記述に関する共起ネットワーク（図2）より、「ムカデ」、「危ない」、「感じる」といった語がつながるグループや、「ウルシ」、「生える」といった語がつながるグループが見られた。国立江田島青少年交流の家では、水晶山に生息する危険な虫や植物についての説明を記した写真付きのボード（写真4）を設置して注意喚起を行っており、対象者は、自然体験活動の運営ボランティアを行う上での事前打ち合わせにおいて、危険な虫や植物に関する注意喚起を参加者に促すようにと説明を受けていた。幼児が自然体験活動に参加している様子を観

察することで、幼児が山に生息しているムカデやウルシに実際に触れる危険性があったととらえられていた対象者が複数名いたと考えられる。子どもたちが普段から屋外の森林地帯で過ごす森のようちえん園では、ダニ等の害虫による被害が多いことが先行研究<sup>11)</sup>により報告されている。本研究においても、幼児が豊かな自然に触れる活動を行う際には、幼児がムカデやウルシ等に触れる危険性があることから、幼稚園教員は危険な虫や植物に触れないように十分に幼児に注意を促すことの大切さが改めて示唆された。

質問2についての自由記述に関する頻出語(表2)より、「山」(出現回数3回)、「滑る」(出現回数3回)といった頻出語が見られた。また、質問2についての自由記述に関する共起ネットワーク(図2)より、「山」、「滑る」といった語がつながるグループが見られた。本研究で実施した自然体験活動が行われた当日は晴天であったが、前日には雨が降り、滑りやすい場所がいくつか見られる状況であった。幼児が自然体験活動に参加している様子を観察することで、幼児が山に登る際に、滑って転倒する危険性があったととらえられていた対象者が複数名いたと考えられる。幼児が自然に触れる機会を増やすことは大切であるが、その際に、幼稚園教員は幼児の怪我につながる危険因子に注意することが重要であると示唆された。

## おわりに

1980年代から一部の幼稚園で自然体験を取り入れた幼児教育が行われるようになり、1990年半ばごろから森のようちえんといった森などの自然豊かな場所で、幼児に豊かな自然体験を提供する幼稚園が注目されてきた<sup>12,13)</sup>。幼児が豊かな自然に触れる機会を園生活において得られることは幼児の発育発達上意義があると考えられるが、豊かな自然環境を整備することが難しい状況を抱える園は少なくない。また、文部科学省<sup>14)</sup>は、幼稚園教員の中には、生活体験や自然体験、社会奉仕体験等が不足している者が見受けられることから、具体的に保育を構想し、実践する力をもつ者を採用するためにも、採用段階において、多様な体験や体験に対して学ぶ姿勢などを加味した評価をすることが望ましいと報告している。本研究により、自然体験活動に参加する幼児の様子を対象者である幼稚園教員養成課程に在籍する学生が、運営ボランティアをしながら観察することで、幼児が自然に触れ合うことの発達の意義を幼稚園教育要領解説<sup>1)</sup>に記載されていることを中心として様々な観点からとらえられていることが明らかになった。また、虫や植物に触れることの危険性や滑って転倒することによるけがの危険性等の幼児が自然に触れる際の安全対策上の留意点についてもとらえられていることが明らかになった。幼稚園教員養成課程に在籍する学生に対して幼児が自然に触れ合う機会を提供することの意義を実感できるような場を設けることの重要性が、幼稚園教育要領解説<sup>1)</sup>に記載されている身近な環境との関わりに関する領域「環境」についての深い理解を促したという点で認識されたことが本研究の強みである。

幼児の自然との関わりについて体験的に理解するために、保育者は、身の周りの自然を探したり、簡単な飼育や栽培を行ったり、自然物を生かした遊びなどの活動を行ったりすることが大切である<sup>15)</sup>。今後の研究の発展として、幼稚園教員養成課程に在籍する学生が、普段の園生活において幼児が触れられる身の周りの自然と関わることの発達の意義をどのようにとらえられるのかということについて明らかにしていくことが期待される。また、幼稚園教員養成課程の学生が保育実践の意味について考える際には、他者との視点の違いを意識化するために、同じ場面で複数の学生が体験したことについて取り上げることが効果的である<sup>16)</sup>。したがって、幼児が自然に触れる様子をビデオ撮影して、後日、幼児の発達の意義について議論するための一つの場面を取り上げて、幼稚園教員養成課程の学生同士が考えを共有する場を設けるといった活動を行うことも意義深いと考えられる。

## 謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきました国立江田島青少年交流の家元所長の妹尾剛様をはじめ、職員の方々に厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

1) 文部科学省(2018): 幼稚園教育要領解説, 株式会社フレーベル館, 50-209.

- 2) 斎藤健司 (2016) : 保育内容「環境」の教材研究-学生の農業体験を通して (2006年~2015年) -, 新見  
公立大学紀要, 37, 41-45.
- 3) 斎藤健司・宇野文夫 (2014) : 保育者養成校入学者の科学的思考力: 看護師養成校入学者との比較, 新  
見公立大学紀要, 35, 37-42.
- 4) 今西亜友美・高橋勇人・今西純一 (2018) : 森のようちえんにおけるケガの発生と安全対策の現状. ラ  
ンドスケープ研究, 81(5), 513-516.
- 5) Eberl, R., Schalamon, J., Singer, G., Ainoedhofer, H., Petnehazy, T., & Hoellwarth, M.E. (2009)  
: Analysis of 347 kindergarten-related injuries, *European Journal of Pediatrics*, 168, 163-166.
- 6) 樋口耕一 (2014) : 社会調査のための計量テキスト分析: 内容分析の継承と発展を目指して, ナカニシ  
ヤ出版, 1-237.
- 7) 樋口耕一 (2021) : 計量テキスト分析・テキストマイニングのためのフリーソフトウェア, [http://  
kncoder.net/](http://kncoder.net/) (2021年11月2日アクセス可能) .
- 8) 田宮緑 (2018) : 体験する調べる考える領域「環境」, 萌文書林, 36.
- 9) 文部科学省 (2012) : 幼児期運動指針, 2012. [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/  
undousisin/1319771.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm) (2021年11月2日アクセス可能) .
- 10) 前田泰弘・小笠原明子・加藤孝士 (2020) : 野外保育が幼児の発達に与える効果に関する研究の 展望と  
課題ー 移動運動と姿勢制御の発達に与える 効果を中心にー, こども学研究, 2, 39-50.
- 11) Weisshaar, E., Schaefer, A., Scheidt, R.R.W., Bruckner, T., Apfelbacher, C.J., & Diepgen, T.L.  
(2006) : Epidemiology of tick bites and borreliosis in children attending kindergarten or so-  
called "forest kindergarten" in southwest Germany, *The journal of investigative dermatology*,  
126(3), 584-590.
- 12) 今村光章 (2011) : 森のようちえんとは何か: 用語「森のようちえん」の検討と日本への紹介をめぐっ  
て, 環境教育, 21(1), 59-67.
- 13) 今村光章 (2014) : 現代の学校教育の再考契機としての森のようちえんの意義-「自然学校としての森の  
ようちえん」を手がかりに-, 環境教育, 23(3), 4-16.
- 14) 文部科学省 (2002) : 「幼稚園教員の資質向上についてー自ら学ぶ幼稚園教員のために」 (報告) ,  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm) (2021年11月2日ア  
クセス可能) .
- 15) 保育教諭養成課程研究会 (2017) : 幼稚園教員養成課程をどう構成するか~モデルカリキュラムに基づ  
く提案~, 萌文書林, 46-49.
- 16) 中島寿子・川崎徳子・白石敏行・村上清文・中村万紀子・大森洋子・高田和宜・志賀直美・武宮道子・  
辻村明日香・大庭美雪・中野朋子・鶴永里恵・中尾知美 (2015) : 一人ひとりの学生に応じた教員養成  
のあり方について考える-保育実践について省察する力を中心に-, 山口大学教育学部学部・附属教育実  
践研究紀要, 14, 45-56.